

あの東日本大震災からまもなく2年を迎えます。大きな被害とともに私たちの心にも傷を与えたあの日を忘れないために、一つの作文を紹介します。平成24年度みやぎ仕事作文コンクール（宮城県主催）で最優秀賞に輝いた登米市立登米中学校2年の佐藤伸さんの作文です。

### みやぎ仕事作文コンクール最優秀賞

## 「父の背中を追って」

僕には今、どうしても叶えたい夢がある。それは消防士になることだ。

あの震災によって、ぼくの住む街は大きな被害を受けた。町民の誇りである尋常小学校の校舎のガラスが割れ、電気や水などのインフラも大打撃を受けた。もちろん信号も停止し交通網も混乱を極めた。

しかし、それ以上の悲劇に見舞われた場所が身近にあった。それは、隣町である南三陸町である。30分超にも達する大津波に襲われるという未曾有の大災害により、南三陸町は壊滅的な被害を受けた。大量の土砂や瓦礫で道は寸断され、一時は完全に孤立した隣町であったが、そこに徒歩で救助に

向かった人々がいた。僕の父もその一人である。

街の消防団員として現地入りした父は、見なれたはずの街並みの変わり果てた姿に言葉を失ったという。

そんな動揺を押し隠しながら、父は生き残った方を背負い、歩ける方を連れ、徒歩で登米町を目指した。力尽きて道端に倒れている方、信じられないほど高い木の上で命を落としている方。その道のりは凄惨を極めたという。父は、同行した方々を努めて明るく励ました。ながら、夜通し救助を続けたのだ。

町でも早速、混乱の收拾に向けて動き出した人々がいた。既に沿岸部から内陸へ、また内陸から沿岸部へとたくさん車が通過し始めていたのだが、止まった信号機の代わりに車の誘導をする人が現

れた。また、避難者の受け入れ態勢を整え始める人も大勢現れ、呼びかけ一つですぐにたくさん布団が集まった。

後で聞いた話だが、沿岸部で働く家族の消息がつかめていなかったにも関わらず、そういった活動に参加していた人もいたのだという。多くの人は、自分の家の片付けも後回しで周りの人のために動こうとしていた。

当時小学生だった僕は、父が、そして町の大人たちが奔走する姿を目の当たりにし、自分にも何かできることはないだろうかと考えた。僕は近所の避難所で働く大人たちの手伝いをするに決めた。「とても助かるよ」と言っていただけことができ、嬉しかった。

だが、文句ひとつ言わずに体を張って救助を続けている父を思うと、無力な自分が悲しかった。もつと人を救う力が欲しい。この瞬間にも尽きようとしている命があるかも知れないのに。僕はそんな思いに囚われ、いてもたってもいられなかった。早く大人になりたいと思った。父の背中が大きく、そして遠く感じられた。

あの日から2年が過ぎようとしている。僕は今、中学2年生だ。消防士になりたいという思いは次第に強くなっている。夢の実現に向けて体や心を鍛えようと、毎日野球に打ち込んでいる。苦手を勉

強も頑張っている。

この秋、僕は生徒会長に選ばれた。責任は重いが、皆の為にできることがあれば、全力で取り組みたいと思ったのだ。楽しく、明るく、そしていざとなれば自分より相手のことを考えて助け合える、そんな学校にしたい。僕の誇りである登米町の人々がそうであるように。

自分の将来を思う時、いつも心に浮かぶ光景がある。それは、ずぶ濡れのお年寄りを背負い、明るい言葉で励ましながら、懐中電灯の明かりを頼りに真っ暗な峠道を歩く父の後ろ姿だ。

父の救った命を思う時、僕の鼓動は熱く高鳴る。そしてそんな事に就きたいと願う。災害から人の命を救いたい。父の背中が、消防士になりたいという目標に気付かせてくれた。

父の肩越しに、僕の進むべき道がはっきり見える。その先に、救いたい命が待っている。その道りは果てしなく続く。だが、僕はこれからもたゆまず歩いていく。まだ遠い、父の背中を追って。



佐藤 伸さん  
登米町・宿小川 / 拓夫さん方

# あの日を 忘れない。

東日本大震災、津波被害で壊滅的な被害を受けた南三陸町で捜索活動をする登米市の消防士（平成23年3月18日）